

日本中國學會報 第70集  
2018年10月6日 発行 抜刷

学界展望 (語学)

佐々木 勲 人  
千葉 謙 悟  
野原 将 揮  
戸内 俊 介  
石崎 博 志  
池田 晋  
八木 堅 二  
鈴木 慶 夏

録する。貴重な資料の特性を知ると共に、東洋学が発展してきた軌跡を考える上でも興味ある一書といえる。この項の文学という枠組みから距離はあるが、学術史に関わる業績として挙げておきたい。  
(永田知之)

## ●語学

### はじめに

今号より語学部門は日本中国語学会が担当することになった。近年の研究状況及び大学の研究体制の変化などにより、単独の大学が学界展望を執筆することは難しく、とりわけ語学部門ではその傾向が顕著であった。そのため、日本中国語学会の会員が個別に依頼を受けて執筆を担当することが常態化していたが、今後は学会として責任ある体制を整え、日本中国語学会からの依頼に対応していくことになった。学界展望の作成という共通の目標を得たことによって、両学会の交流がこれまで以上に深まることを期待したい。

本稿が対象とするのは、2017年1月から12月に原則として日本国内で公刊された著書および研究論文である。ただし、近年は海外で発表される語学研究成果も少なくないことから、重要なものは適宜取り上げることとした。

分類と担当者は以下の通りである。基本的に従来分類を踏襲しているが、文字と訓詁を一つにまとめ、文法・語彙を上中古、近代、現代の三つに分けた。執筆にあたっては、網羅的な記述とならないよう、担当者が興味深いと感じた研究成果をあえて主観的に取り上げるよう努めた。

- はじめに……………佐々木勲人 (筑波大学)
- 音韻……………千葉 謙悟 (中央大学)
- 文字・訓詁……………野原 将揮 (成蹊大学)
- 文法・語彙
  - 上中古……………戸内 俊介 (二松学舎大学)
  - 近代……………石崎 博志 (佛教大学)
  - 現代……………池田 晋 (筑波大学)
- 方言……………八木 堅二 (国土館大学)
- 教育……………鈴木 慶夏 (神奈川大学)

### 一、音韻

2017年の音韻研究についてまず単著から瞥見する。第一に遠藤光暁『漢語音韻論稿』、『東亜言語論稿』（ともに好文出版）。前者は著者の1986年から2016年にかけての漢語音韻史に関する論考を、後者は2001年から2016年にかけての地理言語学を中心とする論考を収録する。漢語音韻の研究を志す者にとって氏の成果は最初に参照すべきものの一つとなっているが、それが前著『漢語方言論稿』（好文出版2001年）とともにまと

まった形で読めるようになったことは多大な便宜をもたらすものといえるだろう。第二に秋谷裕幸『中原官話汾河片音韻史研究』（博士論文、神戸市外国語大学学術情報リポジトリ）。文献からはうかがい知ることのできない原始官話方言について著者自身の現地調査データを用いた緻密な再構が示された。その原始汾河片の音系に9～10世紀河西方言音系と無視できない類似点が存在することを根拠としてこれらに共通の祖語を仮定する説も興味深い。近年中国で発表された氏の《重建官話方言音韻史的设想》（《语言学论丛》55）や《韩城方言调查研究》（徐明彪との共著、中華書局2016年）のような一連の論考と併せ、スケールの大きな官話方言音韻史の構想の一部であることが了解される。

次いで雑誌に言及すれば『KOTONOHA』誌上で対談を挙げたい。吉池孝一・中村雅之「慶谷壽信先生の学問などについて」（6）～（9）では、去年逝去された慶谷氏の目を通じて見た有坂秀世の学問について、重紐論・『切韻』の基礎方言・古代日本語の「vowel-gradationノ法則」・有坂秀世の著書『音韻論』（1940）の4点から検討している。なお発行元の古代文字資料館によれば、ウェブサイト上にて「慶谷壽信学術資料庫」を開設予定であるという。

さらに個別の論文に移る。上古音にはMasaki Nohara（野原将揮）“Preliminary report on the reconstruction of the word ‘iron’ in Old Chinese Phonology”, *Studies in Asian Geolinguistics*（以下SAG）7がある。「鐵」の声母（中古透母）について出土資料を手がかりに検討を加えたものである。中古音については平山久雄「『切韻』193个韵母字是怎样选定的？」（『中国語学』264）および太田斎「韻書と等韻図I/II補説」（『神戸外大論叢』67-4）がある。前者は『切韻』所収の193字の韻目字がどのように選ばれたかという問題につき3つの原則を想定して撰ごとに検討している。後者は前著『韻書と等韻図』に対する補訂であるが、中古音とその資料について現時点で最も詳細な概説であり参照価値が大きい。

近世音にはYoichi Isahaya（諫早庸一）and Mitsuaki Endo（遠藤光暁）“Persian Transcription of Yuan Chinese in the History of China of the Jami’ al-Tawarikh (Ms. Istanbul, Topkapi Sarayi, Hazine 1654)”（『経済研究』9）、富平美波「『統通志』七音略の韻図について」（『山口大学文学会誌』67）がある。前者はペルシャ語資料から元代音を検討する著者の一連の試みの続編である。後者は乾隆年間に編まれた『統通志』所収の「七音略」を清初の音韻学文献として分析する。

現代音に関しては高橋康徳「「不用」の弱化と出現頻度—自然発話音声に基づく分析一」（『国際文化学研究』49）、川澄哲也「“协商”与汉语大通方言的语言变化」（『松山大学言語文化研究』37-1）。ともに一般言語学で提唱される理論に対する非印欧語（漢語）からの検証と言えよう。すなわち前者はBybeeらによる「運用に基づく言語学」に対する、後者はThomasonの提唱するところの「Negotiationがもたらす言語変化」に対する検討である。

方言音韻では太田斎《“马齿苋”转语记》（『神戸外大論叢』67-4）、増田正彦「漢語無錫方言におけるトーンサンディーの生産性」（『音韻研究』20）。前者は形態的に不安定

な三字語（ここではスベリヒユを表す“**马齿苋**”）が通俗的な語源解釈によって特殊な音変化をたどるさまを検証する。後者は無錫方言に見られるパターン拡張型（動詞の重ね型など）とパターン代入型（複合語など）という二種類の連続変調に対し、チェーンシフトをなす後者についてそれが規則による生成であることを示唆する。

地理言語学からのアプローチとしては Kenji Yagi（八木堅二）、Takashi Ueya（植屋高史） and Fumiki Suzuki（鈴木史己）“‘Wind’ in Sinitic”, SAG 4, Suzuki, Ueya and Yagi “‘Iron’ in Sinitic”, SAG 5, Yagi “Tone in Sinitic (monosyllabic forms)” および Ray Iwata（岩田礼）“Typology of Chinese Tone Sandhi and its Historical Implication”（ともに SAG 7）といった一連の報告を挙げる。これらはひとり中国語学に留まらず広く東アジア諸言語との対比という視点から収録されたものである。

以上を要するに、2017年の大勢として例年通り安定した研究成果が発表されたといえるだろう。日本の研究者が上古音や地理言語学のようなホットなテーマに対して発言することは少なくないが、近年はそれが日本国外で発表されることが増えているように感じる。さらに注目すべきは、日本国内で発表されていても中国語や英語で記述される論考が増えてきている点であろう。日本の成果が世界の中国語研究から顧みられるために欠かせない一歩といえる。しかし一方で基礎資料を丁寧に検討すること、および日本語で訳注を与える堅実な作業が積み重ねられていることも見落としてはならない。ここでは前者の例として李乃琦「**玄応撰『一切経音義』諸本系統から見た P.2901**」（『汲古』72）を挙げる。資料の着実な把握という基礎の上に、日本国内外を問わず情報を共有できる言語によって成果を記述していくという傾向は今後の主流となっていくように見える。

（千葉謙悟）

## 二、文字・訓詁

甲骨文字を論じたものとして、松丸道雄『**甲骨文の話**』（大修館書店）を取りあげたい。甲骨文字は高度な専門性が求められる分野であり、甲骨文字を研究する場合、文字そのものだけではなく殷王室世系、貞人、断代研究、さらには殷人の観念世界、思想世界等の背景知識を要するが、本書は甲骨文字の概略と研究状況を包括的にまとめており、言うなれば甲骨文字の手引書である。本書でも松丸氏が概念化した「**文字域**」という抽象的なカテゴリーについて触れられており特筆に値する。このほか改訂を経て、23年ぶりに出版された『**新字源**』（小川環樹、西田太一郎、赤塚忠、阿辻哲次、釜谷武志、木津祐子編、角川書店）もとりあげなければならない。「**文字の成り立ち**」には甲骨、金文、篆文をおさめており、古漢語、訓詁学だけでなく文字学にも資するものとなっている。改訂により助字解説が巻末付録から本文に取り入れられている点には注意が必要である。高橋均『**経典釈文論語音義の研究**』（創文社）は「**論語音義**」と諸家の注釈書、特に皇侃『**論語義疏**』、何晏『**論語集解**』との関係性を精査する。「**論語音義**」の音の部分に関する議論がないのがやや残念ではあるが、陸徳明が「**論語音義**」を著す際に依拠したものとその過程を明らかにする着実な成果と言えよう。このほか漢字と漢字文化圏を扱ったものに沖森卓也・笹原宏之共編『**日本語ライブラリー 漢字**』（朝倉書店）が

あり、極めて有用である。

伝世文献に関連する研究では昨年度と同様に『説文』に関する研究が少なくない。森賀一恵「訓讀説文解字注（一）」（『富山大学人文学紀要』67）は尾崎雄二郎『訓讀説文解字注』を補完することを目的としたものである。また田村（大田）加代子「『説文解字』「許敘段注」訳注の試み（四）」（『饗養』25）は許慎の言語観、文字観を描き出すというよりは寧ろ段玉裁のそれを解き明かそうとするものである。南唐・徐鍇の『説文解字繫傳』「疑義篇」を紐解くことを試みたものに坂内千里「『説文解字繫傳』「疑義篇」考（三）—「通釋篇」中の偏旁について—」（『言語文化研究』43）がある。いずれも実証的かつ堅実な研究であり、今後も継続が期待される。現在、出土資料研究が古文字研究の大部分を占めるとはいえ、説文研究がその必要性を失ったわけではない。寧ろ説文研究と出土資料研究が相互補完することによって古文字学、訓詁学はより深みを増すはずである。

出土資料に関する研究論文は国内外を問わず今もなお活発である。国内の定期刊行物としては、『漢字学研究』、『中国研究集刊』、『中国出土資料研究』、『出土文献と秦楚文化』がある。『漢字学研究』5には例年通り「金文通解」が取められており、日本国内では数少ない金文の訳注として注目される。同号所収の村上幸造「轉注とは何か」（目次には「轉注について」とある）は河野六郎「轉注考」（『東洋學報』59-3,4, 1978年）を踏襲し、その補完を目的とする。ついでながら「同義換読（義通換読）」について述べておくと、兪紹宏、王姪瑋《同義換讀及其複雜性初探—以楚簡文字為例》（『中国語文』2017-2）は出土資料に見える「同義換読（義通換読）」の具体例をあげており、今後の研究の方向を示す好論文である。このほか戸内俊介「中国古代文字論—二十一世紀の古文字学」（改訂新版『中国学入門—中国古典を学ぶための13章』）は古文字学の基礎や最新の楚簡研究のほか、出土資料からみた上古音研究、文法研究をバランス良くまとめ、出土資料を扱った言語研究の動向を知る上で簡潔で優れている。

非発掘簡の扱いについて、『汲古』（小沢賢二「文字学からみた浙江大『左伝』偽簡説の問題点」71、大西克也「浙江大学蔵『左伝』は研究資料たり得るか」72）でも議論がかわされた。この議論により、非発掘資料の真贋を見極めるためには上古中国語の知見、たとえば戦国楚簡の用字法や上古音に関する研究成果を適切に運用する必要があることが改めて示された。

最後に、国外での発表ではあるが上古中国語の研究方法のあり方を示したものとして、大西克也「釋「喪」「亡」」（『第二十八屆中國文字學國際學術研討會論文集』國立臺灣大學）をとりあげたい。本論文は出土資料中に見える「从艸（艸）、亡声」からなる字を整理し、戦国秦漢出土資料と伝世文献に基づき「喪」と「亡」の用法の違いとその語義の変遷を明らかにするとともに、「喪」と「亡」の同源関係を否定する。これは同時にシナ・チベット祖語を射程に収めた \*sm-（\*s-prefix 使役化）再構の可能性を否定するものであり、上古中国語研究さらには漢蔵語研究に大きなインパクトを与えるものである。本論文は伝世文献と出土資料を広く利用し、文字学、文法、音韻学の面から「喪」「亡」の歴史的変遷について検証を加えたものであり、まさに上古中国語研究のあり方

を体現した論考と言えよう。

(野原将揮)

### 三、文法・語彙（上中古）

2017年は古代中国語研究に資する資料に整理の手が加えられ、充実が図られたことが大きな進展である。

野間文史『春秋左傳正義譯注 第一冊〔序・隱公・桓公篇〕』、同『春秋左傳正義譯注 第二冊〔莊・閔・僖公篇〕』（明德出版社）は、『左伝正義』に対し、その諸版本を網羅的に対校しつつ校訂を施し、根拠となる校勘記を附載し、最善のテキストを追究する。同時に、丁寧な注と『左伝正義』独特の用語に対する研究を通して、膨大な量の『正義』を日本語訳し、その正確な理解を求めたものである。上古中国語（春秋戦国～前漢）資料としての『左伝』本文を理解するための一助となるばかりでなく、『正義』が反映する六朝期の言語研究にとっても参照価値は高い。

また、中島長文「魯迅『古小説鈎沈』校本」（京都大学文学研究科中国語学中国文学研究室、京都大学学術情報リポジトリ（KURENAI））もこの年における重要な成果である。『古小説鈎沈』は魯迅が六朝を中心とする古小説の逸書を、散在する資料から輯佚したものであるが、最終的な整理がなされる前に魯迅が逝去してしまったうえ、本文も爾来、校訂されていない。本校本は、魯迅が未定とした部分を定稿にするとともに、関連文献を網羅的に示しつつ、詳細な校勘記を付すことで、正確なテキストを目指して編纂されたものである。今後、中古（後漢～唐末・五代）、とりわけ六朝期の言語を研究する上で必須の資料となることが予想される。

この他、山田大輔「仏教漢文を読む（一）—『百喻経』卷第一校注訓読稿」（『火輪』38）は、南朝斉で漢訳された仏典『百喻経』に対し訓読と現代語訳を併記したものである。訳者が中国語史を専門とすることから、語学的観点からの注が多く、漢訳仏典や中古前期の言語を研究する者にとって、利用価値の高いものとなっている。

以上は伝世資料であるが、出土資料としては、大陸で清華大學出土文獻研究與保護中心編・李學勤編《清華大學藏戰國竹簡（柒）》（中西書局）が出版された。字形や用字法（字と語の配当関係）の面で、これまで知られてきた楚系とは異なる三晋系と覚しき事例が散見されるほか、三晋の説話の中に楚方言が垣間見えるなど、先秦の言語の地域性を語る上で興味深い要素を含んでいる。

次に、研究面での成果であるが、木村英樹・大西克也・松江崇・木津祐子「中国語史における疑問詞の指示特性—〈人〉を解とする疑問詞を中心に—」（『楊凱榮教授還曆記念論文集 中日言語研究論叢』、朝日出版社、以下『楊』）が特筆に値する。中でも第3章から第4章では上中古の疑問詞について、〈人〉を問いの対象とする疑問詞の機能を、求める情報の違いにより、「属性記述要求機能」（未同定の要素について、属性もしくは内包の記述を問い求めるタイプ）と「対象指定要求機能」（未同定の要素について、該当する対象の指定を問い求めるタイプ）の2類に大別した上で、この機能的対立に基づき、“誰”“何”“孰”の選択を決定づける指示的要因を明らかにしている。第3章では、属性記述要求機能の中に、個のレベルでの同定可能な属性記述を求める“誰”系と、類

もしくは範疇としての属性記述を求める“何”系との明確な対立が見られることを明らかにし、第4章では、上古で“孰”が（未熟ながらも）担っていた、リストされた選択肢を対象に指示的指定を求める「リスト指示要求機能」が中古以降に衰退し、代わってn-系統の声母を持つ語“若”“如”“那”がそれを担うようになっていく過程を描き出す。本論文は、疑問詞を機能論的側面から通時的に追究した点、これまでに比肩するものがない論考であり、今後、他の疑問詞研究にとっても1つの指針となり得るであろう。

松江崇《淺談不符合“聲調配列原則”的同義並列雙音詞的產生機制》（『開篇』35）は、同義並列二音節語の成立動機について論じたものである。従来、この種のフレーズにおける形態素の順序については、声調順（平上去入）を初め、声母や主母音といった音韻論的条件をもとに議論が展開されてきた。一方、本論文は声調原則に違反する例について、意味論的条件から成立動機を描いた点、他に類を見ない。例えば、“喜歡”は上声+平声であり、声調原則に違反するが、松江氏は、通例の語順である“歡喜”が、純粹な心理的活動も、心理的活動によってもたらされる表面的活動も表せるのに対し、“喜歡”が純粹な心理的活動しか表すことができないことから、“喜歡”は中古期以降（後漢～）に“歡喜”から派生した有標的な表現であると述べる。この結論が是認されるなら、中古期に成立した違反例は上古期のそれとは、成立動機が違う可能性もあり、従って同義並列二音節語研究には今後、時代層を意識した検証が要求されることを本論文は示している。本論文は研究対象が、上記の“歡喜／喜歡”のほか、“言語／語言”のみであり、事例数の少なさにやや物足りなさも覚えるが、今後の同義並列二音節語研究に新たな方向性を示したと言える。（戸内俊介）

#### 四、文法・語彙（近代）

ここでは宋代から清末の研究を「近代」とし、以下「白話資料」・「滿漢資料」・「域外資料」に大別して素描する。

「白話資料」に基づく研究として注目されるのは、宮下尚子「『元刊雜劇三十種』にみえる<把>および<將>」（『九州中國學會報』55）である。本論文は『元刊雜劇三十種』をコーパスとして、元版『老乞大』とその諸刊本、および『元曲選』で展開された処置式<將>と<把>の分布を論じる。これまで『元刊雜劇三十種』はそのテキストの粗雑さから言語資料としての利用が避けられてきたが、あえて元代の口語に近い言語を反映するものと位置づける。結論として<將>と<把>の使用において、資料の地域差を示す結果は得られず、『朱子語類』にも<把>による目的語前置があることから、モンゴル語の干渉というよりは、宋代以前の語法を継承したものとする。元代漢語の処置式は与格や場所目的語にも用いられたことから、現代語に比し自由度が大きいと言えるが、処置式がどのようなプロセスで現代に観られるような構文的制約を受けるに至ったのかを考える上で興味深い。

理論と応用に目を向けると劉羈「淺析《三言二拍》部分作品中的对称詞—从历史语用学的角度出发—」（『中国語学』264）は、英語学や一般言語学で展開された歴史語用学とポライトネス理論で「三言二拍」（一部）の「对称詞（呼びかけ語）」を考察する。中

国語特有の事象に配慮している点が評価できる。また方法論として目立つのは文法化・語彙化の研究で、胡玉華「近代漢語中的“怪道”」（『中国語学』264）は“怪道”の文法化・語彙化を論じ、類義語や現代方言と関連付けた論考である。またこの論文をはじめ植田均門下による白話資料と『醒世姻縁伝』の研究が積極的に行われている。

慶谷壽信（『開篇』35）、楊凱榮（『楊』）両氏の記念論集が編まれている。前者は、姚偉嘉「成化本《白兔記》中北方俗語詞札記」を収める。南戯『白兔記』成化本の語彙を通じて北京で上演された南戯の使用言語を考察する。本テキストは、成立後に修正が加えられていない「同時代資料」として貴重である。そして成化本には北方の観客に迎合した結果として北方方言語彙が反映されたとする。後者の論集は現代語のみならず近代漢語の論文も寄せられ、特に木村英樹・大西克也・松江崇・木津祐子「中国語史における疑問詞の指示特性—〈人〉を解とする疑問詞を中心に—」は機能論的観点で〈人〉を対象とする疑問詞の指示特性を通時的に扱う。近代漢語では木津祐子が『祖堂集』、『朱子語類』を論じ、個別化・個性化機能における“箇”の重要性を指摘する。また、『楊』には石村広、林立梅など現代語研究者による近代語研究も含まれ、今後この流れが増えると思われる。

今後の期待として奥村佳代子の清代の供述書の研究を挙げたい。「清代雍正期檔案資料の供述書—雍正4年（1726）允禩允禵案件における「供」の言葉」（『周縁アプローチによる東西言語文化接触の研究とアーカイブスの構築』）などは、現代の書面語との連続性にどう位置づけるか注目される。

「満漢資料」は竹越孝により基礎固めが行われている。最古の満漢対訳形式を持つ満州語教材『満漢成語對待』の翻刻と研究、イエズス会士デ・ポアロ（賀清泰）の満漢合璧版『古新聖經』（ロシア科学アカデミー東方文献研究所蔵）の訳注が行われた（『或問』31、32）。後者の漢語部分の文体は他の満漢合璧教材類と異なり、中国語史のみならず聖書翻訳史、満洲語史の面からも興味深い。さらに満州語会話書『Tanggū meyen』（一百條）の訳注や研究も行われ、その満漢合璧版である『清文指要』とともに、『『一百條』・『清文指要』対照本（I）本文篇』（神戸市外国語大学研究叢書60）にまとめられた。

最後に「域外資料」をとりあげる。ここでは中国以外で編纂・利用された資料を「域外」として括り、下位分類として「唐話・日本資料」・「泰西資料・訳語」に分けて動向を追いたい。

まず「唐話・日本資料」における最大の動きは、内田慶市編『北京官話全編の研究』上巻・中巻（関西大学出版部）である。『北京官話全編』とは19世紀末に日本人領事・深澤暹が編集した全378章の北京語の記録である。明清の官話課本は主に非漢人により編纂・利用され、さらにウェイド『語言自邇集』以降、北方官話から南方官話に「官話」の学習対象がシフトしたが、この動きを象徴する資料といえる。上巻・中巻は本文の影印と索引を掲載し、2018年刊の下巻は研究成果が掲載される。

「泰西資料・訳語」の分野は、内田慶市『周縁アプローチによる東西言語文化接触の研究とアーカイブスの構築』（ユニウス）および『東アジア文化交渉研究』10において、



とりわけ漢訳聖書の研究で進展がみられた。後者所収の沈国威「**我們为什么需要二字词？—语言接触与汉语的近代演化：序说**」は、近代漢語から現代漢語への二音節語の増加について、その要因とメカニズムおよびその歴史的背景を考察したものである。とりわけ五四以降の言文一致の基礎のうえに“**联合式**”複合語の増加が重要であることを指摘する。  
(石崎博志)

## 五、文法・語彙（現代）

2017年は大型の論文集が相次いで刊行されたこともあり、現代語にとっては豊作の年であった。中でもとくに重要な出来事と言えるのは、杉村博文『**現代汉语语法研究—以日语为参考系**』（大阪大学出版会）、『**現代中国語のシンタクス**』（日中言語文化出版社）の2冊が出版されたことであろう。杉村氏のこれまでの研究成果の一部をまとめたものであり、扱うテーマはアスペクトやヴォイスなど王道のものから“**他妈的**”の統語機能まで多岐にわたる。加筆や修正が加えられている章も少なくなく、例えば『**現代中国語のシンタクス**』の疑問詞連環構文を扱った章では、意味の解釈が修正されているほか、最近の小説や映画からの用例が追加され、章末には付録として関連する新興形式“**爱谁谁**”についての分析が取められている。この章の下敷きになっているのは1992年発表の「**疑問詞連鎖構文の研究**」（『**言語の対照研究と語学教育**』）で、筆者の知る限り疑問詞連環構文に関する他のどの先行研究よりも詳細で本質的な分析が行われているものなのだが、その部分についても修正・アップデートを躊躇わないところに、杉村氏の真摯な研究姿勢が表れている。

上記2冊以外の論文・単行本については、以下でテーマ別に紹介していく。まず、語彙研究の面では、語構成の問題を扱った**袁晓今**「**「2+1」型三音節複合名詞の二音節語基**」（『**杉村博文教授退休記念中国語学論文集**』（白帝社）、以下「**杉**」）がある。**袁氏**は「**2+1**」型三音節名詞（“**博士／生**”など）の二音節語基を形態的緊密性によって5つに分類し、各類の頻度、生産性、内部構造などについて分析をおこなっている。中でも三音節語全体の7割超を占める「**複合語**」と「**組成分**」の2類に対しては重点的な分析をおこない、二音節語基が語として成立する前者（“**地板砖**”など）と、成立しない後者（“**高脚杯**”など）では三音節語の形成プロセスが異なることなどを指摘している。

副詞研究では、橋本永貢子「**副詞“都”と文の叙述タイプ**」（『**現代中国語研究**』19）などが発表されている。橋本論文は“**几乎每天都下雨**”のようなあってもなくてもよい総括の“**都**”が実は文の叙述タイプと関連していることを指摘したもの。話し手が現場立脚的な視点を取る場合には“**都**”が生起しにくく、現場から心理的距離を置き傍観者的視点を取る場合に生起しやすいことを、豊富な用例に基づいて論証している。

補語に関する研究では、2017年3月に急逝した島津幸子氏の「**V・le・X・Yの意味機能**」（『**楊**』）に触れておきたい。“**走了进来**”のような形式（V・le・X・Y）と“**走进来**”のような形式（V・X・Y）との意味機能上の差異を、小説などの用例をもとに分析したもので、前者が動態を動態のまま描く形式、後者が動態を静態として描く形式であると結論する。V・le・X・Yの表現機能にも注目し、当該構造が動態的であるが

ゆえに際立ちを与えられやすく、テキスト上では重要人物の登場や象徴的な動作などに用いられることを指摘する。島津氏はこれまで複文、存現文、そしてV・le・X・Yといった難題に挑んでこられ、今後もまた重要な研究を続けて行かれるものと思われていただけに、学界にとっては大きな損失となってしまった。

アスペクト関連では、“了<sub>1</sub>”の文終止の問題を焦点構造の観点から論じた毛兴华「北京話口語中“SVleO”格式的完句問題」(『楊』)などがある。“SVleO”は事態の発生そのものではなく、その詳細に焦点を置く形式であるが、“SVleO”単体では焦点が不確定のままであるため、“SVleO”が担いうる複数の語用論的機能のうち、どれと関連付けられるかが想像しにくい。それゆえに文終止に対する母語話者の判断には往々にしてズレが生じるのだという。“了”以外では、“过”の経験用法について考察し、経験の本質が「体得事項」という属性であることを示した渡辺昭太「経験認識と動詞接尾辞“V过”の機能」(『現代中国語研究』19)などが注目される。

ヴォイスを扱ったものとしては、中間態(middle voice)に取り組んだ刘洋「从生态心理学的角度看汉语“中间结构”」(『中国語文法研究2017年巻』)などが挙げられる。刘論文では生態心理学の知見に基づき、中間構文を主語のアフォーダンスを表すものと捉えることを提案する。構文の述語部分には探索活動と探索結果が含まれ、この2つが独立して表現されるか否かによって、構文としての典型度に差が生じることを指摘する。

モダリティ方面では、井上優「中国語の付加疑問の機能」(『現代中国語研究』19)が、付加疑問“是吗”“是不是”“是吧”“不是吗”の機能を考察している。井上論文では“是不是……?”“不是……吗?”などとの比較を通し、付加疑問とは聞き手側に属す情報を聞き手にかわって言語化した後に添えるもので、聞き手に対する是認待ちの態度を示すものであると説明する。また、杨凯荣「从标记有无看汉日对信息来源的处理」(『杉』)では、三人称感覚・感情表現と状態変化表現における証拠性マーカーの有無について、日中対照研究をおこなっている。

一方、構文論の観点から、楊氏と同じ感情・感覚表現を分析しているのが、木村英樹「感情と感覚の構文論」(『杉』)である。木村論文では、感情詞・感覚詞を更に7類に分け、それぞれの取りうる構文タイプを整理するとともに、その意味論的動機について詳しく論じている。構文研究ではほかに、李佳樑「经历时间与属性述谓」(『楊』)が時間量フレーズ(T)を含むSVOT文について論じている。李論文では、SVOTのVOの特徴、状語の位置などを根拠に、SVOTが実は主述述語文の属性事態用法・多寡タイプ(木村英樹2002「二重主語文の意味と構造」、『認知言語学I:事象構造』)であることを指摘する。SVOTのTには「(時間が)長い/短い」ことが含意され、VOT全体で主語に対する属性叙述となっているのである。その他、連動構造における「手段」と「目的」の関係を深く掘り下げて考察した小野秀樹「中国語の連動構造における動詞句の意味的連鎖」(『楊』)なども重要な知見を含んだ論考である。また、翻訳になるが、「中国語をベースとした言語類型論・認知言語学研究叢書」シリーズから徐烈炯・劉丹青(木村裕章訳)『主題の構造と機能』(日中言語文化出版社)が出版された。主題を文成分として扱うことを提唱した名著で、主題を含む様々な構造、構文の分析がおこなわ

れている。

語用上の問題を扱ったものでは、聞き手のもとへの移動を表す“来”を扱った張苕「ポジティブ・ポライトネスのストラテジーとしての“来”」（『楊』）が興味深い。英語ではこうした移動に対して聞き手の視点を取って一律に‘come’を使用できるため、ポライトネスの問題という認識が早くから形成されていたが、中国語でこうした“来”の用法は限定的であり、ポライトネスと関連付けて議論されることが少なかった。張論文では“来”が用いられるコンテクストの分析やアンケート調査などを通して、「聞き手との親疎／上下関係」などに起因する対人的配慮が“来”の選択を左右していることを明らかにした。

初学者向け文法概説書としては、木村英樹『中国語はじめての一步〔新版〕』（ちくま学芸文庫）が出版された。1996年にちくま新書から出ていた旧版に疑問詞、ヴォイス、存在文、空間認識などに関する新たな内容が加えられている。（池田晋）

## 六、方言

まず理論的研究として、岩田礼「語彙変化に関わる言語地理的要因の再検討」（『方言の研究3』）は中国語方言に見られる語彙変化のメカニズムを日本語方言との対照などによって一般化している。

遠藤光暁他編著『Studies in Asian Geolinguistics』（SAG 4-7）は、アジア全域の言語史を見据えた（東京外大A A研共同）研究課題に関する論文集で「風」「鉄」「類別詞」「声調とアクセント」を中心とした研究成果をまとめる。項目ごとに隣接する言語の詳細な地図が描かれ、単純な統計的手法からは見過ごされやすい地理的連続性が明らかにされている。中国語部分は岩田礼・植屋高史・八木堅二・鈴木史己が担当し、中でもRay IWATA “Typology of Chinese Tone Sandhi and its Historical Implication”, SAG 7は連続変調の構造的類型化という高度な分析を地図に示す。右重型の句強勢と左重型の複合語強勢の発達を北方方言の特徴とし、文脈依存タイプの振る舞いに南北の種類の違いが反映され、中間地域で最も革新的な中和類型が出現することを論じる。なお遠藤光暁『漢語音韻論稿』『東亜言語論稿』（ともに好文出版）は本課題とも関連し、該博な識見が発揮されている。言語類型地理論的観点からも興味深い分析を行う論文に鈴木武生「動詞コピー構文の語用論的解釈はどこから来るのか？—台湾閩南語との比較から—」（『楊』）があり、普通話と台湾閩南語の動詞コピー構文（VCC）を比較し、台湾閩南語のVCCでは普通話に見られるV1の目的語に関する制約が緩く、副詞やアスペクト助詞もV1に付加でき、「予想外の結果」「超常量解釈」「目的語名詞の状態変化」についての語用論的制約が無いといった点から、閩南語V1の高い自立性を指摘し、普通話のVCCの情報構造はV1が前提情報を担いV2が焦点構造を担うが、閩南語では使役連鎖に従って概念構造が構成され、V1が命題の参照フレームを、V2が動詞補充情報を担うとする。

一方、石村広「論《语言地理类型学》的语法观」（『慶應義塾中国文学会報』1）は橋本萬太郎の類型変化説を批判し、上古以来中国語は主要部先行型と主要部後行型の混在

する類型であるとの観点から「動結式」の分析を例に南方の巡行構造（VOR式）と北方の逆行構造（VRO式）の連続性を主張する。

言語史研究において方言研究は重要な役割を果たすが、人口と地理の規模が大きな中国語ではその意義が特に大きい。太田斎《“马齿苋”转语记》（『神戸外大論叢』67-4）は、「すべりひゆ」の方言語形を博搜し、比較方言学的手法によってその多様な変化の過程を分析する。秋谷裕幸《邵将区光泽寨里方言里的古浊入声分化》（『開篇』35）は、光泽寨里方言で入声となる古全濁入声字が閩北方言中の全濁入A類と対応し、全濁入A類の無気閉鎖音・破擦音が濁音化し全濁入B類となった後に残されたものであるとし、次濁入声にもA類とB類に分かれていた痕跡があるとする。田中智子「客家語美濃方言の否定詞 m11（毋）、mo11（無）と述語類型」（『楊』）は客家語美濃方言の否定詞を他の南方方言と比較しつつ分析し、非存在・非所有を表す mo の機能が単語レベルで静的事象の否定にも拡大するとする。

世代差調査からは現在進行中の言語変化が直接的に示されることが期待される。李仲民「近代台湾における漢語方言の変化」（『方言の研究3』）は台湾西部250キロにおよぶ29地点（各地点世代の異なる三人程度を調査する）のグロットグラムの表14枚を含む。日高知恵実「徐州方言の「箕」「ちりとり」「ほうき」に見られる音声的・語彙的差異」（『開篇』35）は1940年代から90年代生まれ99名のデータに基づき徐州方言の語彙と音声の変化を跡付けようとしている。

理論的研究の基礎でもある記述的研究の重要性は本展望前号担当者の言の如くで、『開篇』35には、文法記述では根岸美聡「浙江臨海方言のアスペクト表現形式」、崔山佳「諸暨楓橋方言的代詞 魏業群」が、同音字表では武陟（河南）、祁県（山西）、汾陽（山西）、汾西（山西）、宜川（陝西）、永城茴村（河南）、九姓漁民方言（浙江）のものが収録されている。確立された方法による研究の蓄積も重要だが、複合語における Sandhi 現象を取り上げた太田斎「揚中方言調査ノートから」（『開篇』35）のように新たな研究を開拓する意図を持つ方言記述も重要であろう。

最後に中国語と近隣言語の接触に関する個別的研究として、川澄哲也「“協商”与汉语大通方言的語言变化」（『言語文化研究』37-1）は青海省東北部大通県の土族語と漢語の接触・混合語形成に関する調査・考察、包聯群「1960年代の満州語口語にみられる中国語の影響」（『楊』）はチチハル市富裕県三家子村の調査報告に基く満州語への中国語の影響の分析である。（八木堅二）

## 七、教育

2017年は、中国語教育学会の学会誌『中国語教育』15（以下『中』）において読解教育の特集が組まれた。平井和之「初級段階での読解教育の必要性と可能性」では、大学共通教養教育の初級中国語は、発音・会話と基本的な文法に重点がおかれ、読解能力を向上させる機会が多くはない現状を受け、初級段階から積極的に読解教育を展開すべきだと論じる。三瀧正道「読解力養成への試み—現代白話書面語（論説体）への取り組みを中心に—」は、半世紀以上にわたり研究・教育スキルの開発がなごりにされてきた

現代中国語白話書面語に対する「レベル式読解力養成システム」について概要と実践例を述べる。大宅利美「ピア・リーディングの実践報告—第二外国語中級クラスを中心に—」は、対話を通して思考を外化・可視化し、リーディングの結果ではなく過程を扱うピア・リーディングの実践報告である。

教育研究は、人の研究（学習者・教授者および両者のインタラクション等）と言語の研究（中間言語・目標言語・教育文法等）が大きな支柱である。まず、人の研究を挙げる。安藤好恵「日本の大学における中国語専攻学習者の資格試験に対する動機づけ」（『中』）では、中国語専攻2～4年生の中国語資格試験に関する動機づけとして、内発因子と実利志向因子は2年生が4年生より有意に高く、努力志向因子と関係性志向因子は学年による差が見られない等の指摘がある。胡玉華、宗健華「[PPP]から[PNPP]へ」（『中』）は、学習歴2年の学生の中国語上級会話クラスで、気づき（noticing）をとり入れた「P(roduction)-N(oticing)-P(resentation)-P(ractice)」という、まず実践しそれから教科書で確認する方法を試行し、その結果と将来への可能性を論じる。

以下の二論文も学習者を研究対象とするが、従来よく見られた横断的研究による定量分析では捉え難い教育事象に質的分析を加えて挑んでいる。三井明子「日本人の汉语学習观念研究—基于在华与在日汉语学习者的问卷调查及访谈」（『中』）では、量的研究と質的研究の両アプローチにより、日本人中国語学習者のビリーフには「自己言語能力に対する評価」、「中国語学習の目的」等にその特徴があることを論じる。杉江聡子「日本と中国の遠隔交流が創出する質的価値の探求」（『中』）は、ブレンド型学習に含まれる学習プロセスのうち、母語話者との遠隔交流に焦点を当て、日本と中国の参加者の評価に基づき、認識した成果や価値についてアンケート集計と質的データ分析による統合的解釈をおこなう。

次に、言語に関する研究を挙げる。張恒悦「[同類]を表す“也”と“も”—日本語母語話者が産出した誤用例の分析を通して—」（『中』）は、多くの初級教材が学習事項とする副詞“也”には、日本語「も」の影響を受けたと見なし得る誤用が目立つことから、“也”と“も”が完全には対応しないことを、主述述語文における文中の生起位置や対比焦点の手段等の観点から明らかにする。謝平「浅谈“了<sub>2</sub>”」（『中』）は、学習者が“了<sub>1</sub>”と“了<sub>2</sub>”を区別できないのは、“了<sub>2</sub>”が「変化」「新状況」を表すという文法説明に理由があるのではないかという教育現場に立脚した問題意識から、“了<sub>2</sub>”の基本的な意味は、あるトピックがある事態や状況になっていることを説明するもので、「変化」や「新状況」はこの基本義から派生したものだ論じる。

以下の論文は、中国語学の文法研究との関連から中国語教育における文法のあり方に言及したものである。陶炼「“理解”还是“生成”：浅议语法教学的目标」（『汉语与汉语教学研究』第8号、以下『汉』）は、文法規則には類推性だけでなく非類推性もあるため、機械的な文法練習は文法運用能力の向上にとって限界があり、現状ではコミュニケーション的な文法練習が不足している点を論じながら、文法教育の目標は「生成」か「理解」かについて考察する。

教授者が漠然と共有してきた経験的感覚を検証したものとして以下の論考がある。董

玉婷「日本語母語話者による中国語声調の知覚と産出」(『中』)は、2音節語を対象にした実験により、知覚面では第3声が最も難しく、特に「第3声—第1声」と「第3声—第2声」の組み合わせの難度が高いこと、産出面では、前音節・後音節ともに第3声が最も困難であることを示す。張婧禕、玉岡賀津雄、勝川裕子「書字と音声提示のギャップ—日本人中国語学習者による読解と聴解の比較—」(『漢』)では、テキストの内容を推測する必要がある問題では、漢字知識ではなくより一般的な知識が援用されるため、書字提示と音声提示の違いは見られないこと、情報量の多いテキストでは、書字提示では情報過多になりやすく、音声提示より理解が難しいこと等を指摘する。

(鈴木慶夏)